

四年制大学の新設児童学科における学生の意識に関する検討(4) —学年による授業の学び、子どもイメージ、保育者効力感の比較—

An attitude of first to fourth grade students at the university of newly established department of child studies (4) : Compare their interests in the lectures, their images of children, and pre-school-teacher-efficacy.

岡田智・大嶋恭二・矢吹美美子・安田悟・入江礼子・川上雅子
足立美和・河原紀子・村上康子・小原敏郎・武藤安子

Satoshi OKADA, Kyoji OSHIMA, Fumiko YABUKI, Satoru YASUDA, Reiko IRIE,
Masako KAWAKAMI, Miwa ADACHI, Noriko KAWAHARA, Yasuko MURAKAMI,
Toshio OHARA, and Yasuko MUTO

問題と目的

本研究は、2007年(平成19年)に新設された児童学科の学生を対象とし、新設学科ゆえの学生の学び、生活の実態を捉えようと試みた継続研究(河原ら、2007;村上ら、2008,小原ら、2009)である。本研究の特色としては、現在、児童学科には一期生から四期生が揃い、過去の調査と共通する項目を用いて学年による比較を行えることにある。共通する調査項目とは、1)授業の学び、2)保育者効力感、3)子どもイメージ、である。

一期生から三期生の学びの特徴や保育者効力感、子どもイメージを比較した昨年の研究(小原ら、2009)では、一期生(3年生)の授業での学びの実態と実習などの現場体験と関連した保育者効力感や子どもイメージが見られた。特に、「保育者効力感」では、保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができる「効力の認知」の得点が、3年生が最も高かった。「子どもイメージ」に関して、3年生が他の学年と比べて有能的イメージ、安定的イメージを持っていることが明らかになった。

この結果からは、一期生(3年生)では、授業の学びがある程度積み重なっていること、保育所実習の経験が学生に位置づいていることなどが伺われ、児童学科のカリキュラムの一定の効果を確認することができた。

今年度は一期生が4年生になり、施設実習や幼稚園実習を経験し、さらに、専門科目を多く受講し、それぞれのゼミに配属され、専門内容を学ぼうとしている時期である。また、保育園や幼稚園等の就職活動が本格的になり、個々の学生が動き出している時期でもある。本研究では、学年による比較を行うことで、保育者養成に主眼を置く現在のカリキュラムの妥当性や課題が明らかになると考える。また、各種の実習を経験した4年生と、その途中にある3年生、これから実習に臨む1、2年生の「保育者効力感」や「子どもイメージ」を比較することで、保育所実習が「保育者効力感」「子どもイメージ」に与える影響を見たい。

方法

1. 調査対象者 本学児童学科第4年生(一期生、2007年4月入学)、3年生(二期生、

2008年4月入学)、2年生(三期生、2009年4月入学)、1年生(四期生、2010年4月入学)。それぞれ、100名程度。

2. 調査方法 児童学科の各学年の学生に、2010年7月、それぞれ授業時間に質問紙を配布し、その場で回答を得た。20分程度で質問紙に回答してもらい、その後、すぐに回収した。
3. 調査内容
 - 1) 調査対象者の基本属性を把握するために、「学年」「希望進路」「大学入学前の子どもとのかかわり経験」「大学入学後のアルバイト・ボランティア経験」についての質問項目を設けた。
 - 2) 学生の授業の学びがいかなるものか明らかにするため、前回までの調査と同じ質問項目を設け、児童学科の各学年の学生に回答を求めた。項目は、若林ら(1994)が行った、所属する学部学科への認識や意識に関する自由記述の結果と、吉田ら(1999)の大学生のライフイベント項目を参考に、授業の学びについて29項目設け、それらの質問項目に対し、「おおいにそう思う」から「まったくそう思わない」の4件法で回答を求めた。
 - 3) 子どもイメージについて明らかにするため、矢野ら(2003)および岡田ら(2006)を参考に、「暗い-明るい」、「消極的な-積極的」といったマイナスイメージを表す形容詞の対29項目について7件法で回答を求めた。
 - 4) 保育者効力感については、先行研究である三木・桜井(1998)の尺度を援用することとした。10項目について、「非常にそう思う」から「ほとんどそう思わない」の5件法で回答を求めた。

結果と考察

1. 記述統計

1) 希望進路について

「将来、子どもと関わる仕事につきたいと思いますか」という質問に対して、「はい」と回答した者は、児童学科の学生全体では92.9%であり、非常に高い値が示された(表1)。これを学年別で見えていくと、1年生では「はい」と回答した者が97.0%、2年生では96.8%、3年生では86.7%、4年生では90.7%であった。どの学年も9割程度が、将来、子どもと関わる仕事につきたいと思っており、保育や幼児教育関係の仕事への希望が高かった。ただ、学年差も見られ、カイ二乗検定、残差分析を行った結果から、3年生が有意に低い値を示した($\chi^2_{(3)} = 10.94, p < .05$)。1、2年生に比べて、3、4年生が低めの値をだしたが、学年が進むにつれ、さらに子どもとかわる経験や保育の専門的な授業が増えていくこともあり、自身の適正や進路について変化が見られたのではと考えられた。また、今回の学年の横断的調査からは、就職などの進路の方向づけは、2年生と3年生の間の頃に行われるかもしれないことを示唆している。

2) 入学前の子どもとのかかわり経験

「これまで、子ども(乳幼児から小学生程度)と遊んだり、お世話したことがありますか」という質問に対して、「ある」と回答した者は、児童学科の学生全体では95.5%であり、非常に高い値が示された(表1)。カイ二乗検定、残差分析を行った結果から、2年生が有意に低い値を示し、3年生が有意に高い値を示した($\chi^2_{(3)} = 10.60, p < .05$)。

3) 大学入学後のアルバイト・ボランティア経験

「大学に入学後、幼稚園や保育所、福祉施設など保育関係の施設でアルバイトやボランティアをしたことがありますか」という質問に対して、「ある」と回答した者は、34.4%と低い値が示された(表1)。しかし、これを学年別で見えていくと、1年生では「ある」と回答した者が7.1%、2年生では27.8%、3年生では48.0%、4年生では58.1%であり、値が高くなっていた(表1)。カイ二乗検定、残差分析を行った結果

四年制大学の新生児童学科における学生の意識に関する検討（４）

表1 希望進路、子どもとのかかわり経験、アルバイト・ボランティア経験

| | 全体 (N=380) | | 1年生 (N=99) | | 2年生 (N=97) | | 3年生 (N=98) | | 4年生 (N=86) | |
|-------------------------|-------------------|-------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-------------------|-------------------|------------------|------------------|
| 子どもと関わる仕事 につきたい | はい 352 (93) | いいえ 27 (7) | はい 96 (97) | いいえ 3 (3) | はい 92 (97) | いいえ 3 (3) | はい 85 (87) | いいえ 13 (13) | はい 78 (91) | いいえ 8 (9) |
| 入学前の 子どもと関わり経験 | ある 363 (96) | なし 17 (5) | ある 96 (97) | なし 3 (3) | ある 88 (91) | なし 9 (9) | ある 97 (100) | なし 0 (0) | ある 81 (94) | なし 5 (6) |
| 保育関係の バイトや ボランティア | ある 131 (34) | なし 250 (66) | ある 7 (7) | なし 92 (93) | ある 27 (28) | なし 70 (72) | ある 47 (48) | なし 51 (52) | ある 50 (58) | なし 36 (42) |

数値は度数、（ ）の数値は%をあらわす

から、1年生に比べて3・4年生が有意に高い値を示した ($\chi^2_{(5)} = 64.01, p < .01$)。学年が上がるにつれ、学校以外で保育の経験を積んでいるものが増えていることが明らかになった。

2. 授業の学びについて

共立女子大学の児童学科では、カリキュラムの柱として、「教育と保育」「発達と臨床」「生活と文化」「福祉と共生」という4つの領域を設定し、なおかつ、「フィールドワーク」をカリキュラムの中に位置づけている。「授業の学び」に関して、学科の専門科目としてこれらの4領域とフィールドワーク、及び、専門科目以外の「教養教育と家政学部共通科目」、児童学科全般という項目について、4件法で調査を行った。その結果を表2に示す。

児童学科の全学生のデータを見ると、専門科目以外の科目と、学科専門科目の4領域及びフィールドワークにおいて、「授業内容に興味を感じている」の得点が3点以上であった。特に、「生活と文化」「発達と臨床」「フィールドワーク」の得点は3.3以上であり、興味の高さが示された。

児童学科全般の質問を見ると、全体では「児童学科に親しみを感じている」「児童学科で学

んでいることが理解できている」の得点が3点以上であった。また、「児童学科での学びは将来に役立つと感じている」の得点が3.4点以上であり、特に得点が高いことから、学科での学びが将来の進路に結びついていることが伺えた。

次に、学年による差を見るために、授業の学びの項目について分散分析を行った。なお、「発達と臨床」「福祉と共生」領域は、1年次の前期には開講科目がほとんどないため、1年生にはこれらの領域の項目に回答を求めなかった。そのため、これらの領域では2年～4年生を対象とした。検定の結果、「専門科目以外」の2項目、「教育と保育」の1項目、「発達と臨床」の2項目、「生活と文化」の2項目、「福祉と共生」の1項目、「フィールドワーク」で2項目、児童学科全般の2項目で有意差が見られた（表2）。

特徴的な結果を見ていくと、各領域において「授業内容に物足りなさを感じている」という項目で有意差が見られることが多く、総じて4年生が他の学生に比べて有意に高い値を示していた。また、「発達と臨床」「生活と文化」では、「授業内容が期待していたものと違うと感じている」という項目で、3年生及び4年生が有意に高い値を示していた。

表2 授業の学びの各項目の平均 (SD)

| | | 全体 (N=380) | 1年生 (N=99) | 2年生 (N=97) | 3年生 (N=98) | 4年生 (N=86) | 有意水準と 多重比較 |
|--|---|-----------------|---------------|----------------|----------------|---------------------|-----------------|
| 専 門 科 目 以 外 | 「教養教育」「家政学部共通科目」 | | | | | | |
| | 1. 授業内容に興味を感じている | 3.08 (0.6) | 3.25 (0.6) | 3.00 (0.7) | 3.06 (0.6) | 2.98 (0.5) | ** 1年>2、4年 |
| | 2. 授業内容が期待していたものと違うと感じている | 2.31 (0.6) | 2.27 (0.7) | 2.30 (0.6) | 2.28 (0.6) | 2.41 (0.6) | |
| | 3. 授業内容がよく理解できている | 2.83 (0.5) | 2.84 (0.5) | 2.75 (0.5) | 2.88 (0.5) | 2.85 (0.5) | |
| 4. 授業内容に物足りなさを感じている | 2.19 (0.6) | 2.08 (0.6) | 2.10 (0.7) | 2.23 (0.6) | 2.38 (0.6) | ** 4年>1、2年 | |
| 児 童 学 科 専 門 科 目 | 「教育と保育」(教育原理・保育原理・教育課程論・児童理解の方法など) | | | | | | |
| | 5. 授業内容に興味を感じている | 3.16 (0.7) | 3.32 (0.7) | 3.06 (0.7) | 3.15 (0.7) | 3.09 (0.5) | * |
| | 6. 授業内容が期待していたものと違う | 2.19 (0.6) | 2.27 (0.8) | 2.09 (0.5) | 2.16 (0.6) | 2.22 (0.6) | |
| | 7. 授業内容がよく理解できている | 2.81 (0.5) | 2.79 (0.6) | 2.75 (0.5) | 2.84 (0.5) | 2.88 (0.4) | |
| | 8. 授業内容に物足りなさを感じている | 2.09 (0.6) | 2.10 (0.7) | 2.00 (0.6) | 2.06 (0.6) | 2.22 (0.6) | |
| | 「発達と臨床」(発達心理学・障害児保育・教育相談の理論と方法・発達支援論など) | | | | | | |
| | 9. 授業内容に興味を感じている | 3.34 (0.6) | / | 3.43 (0.6) | 3.29 (0.7) | 3.22 (0.5) | |
| | 10. 授業内容が期待していたものと違うと感じている | 2.14 (0.6) | / | 1.98 (0.4) | 2.27 (0.7) | 2.17 (0.7) | ** 3年>2年 |
| | 11. 授業内容がよく理解できている | 2.83 (0.521) | / | 2.87 (0.49) | 2.78 (0.58) | 2.85 (0.47) | |
| | 12. 授業内容に物足りなさを感じている | 2.09 (0.6) | / | 1.90 (0.5) | 2.12 (0.6) | 2.26 (0.7) | ** 3、4年>2年 |
| | 「生活と文化」(造形・音楽・体育・子どもの生活と遊びなど) | | | | | | |
| | 13. 授業内容に興味を感じている | 3.53 (0.6) | 3.64 (0.5) | 3.51 (0.6) | 3.53 (0.6) | 3.44 (0.6) | |
| 14. 授業内容が期待していたものと違うと感じている | 1.95 (0.7) | 1.93 (0.8) | 1.75 (0.7) | 1.93 (0.7) | 2.21 (0.7) | ** 4年>1、2、3年 | |
| 15. 授業内容がよく理解できている | 3.14 (0.5) | 3.23 (0.6) | 3.10 (0.5) | 3.11 (0.6) | 3.09 (0.5) | | |
| 16. 授業内容に物足りなさを感じている | 1.89 (0.7) | 1.80 (0.7) | 1.76 (0.6) | 1.82 (0.7) | 2.21 (0.6) | ** 4年>1、2、3年 | |
| 「福祉と共生」(現代社会福祉論・児童福祉・家族援助論・社会福祉援助技術など) | | | | | | | |
| 17. 授業内容に興味を感じている | 3.29 (0.7) | / | 3.20 (0.6) | 3.41 (0.7) | 3.27 (0.6) | | |
| 18. 授業内容が期待していたものと違うと感じている | 1.99 (0.6) | / | 1.89 (0.5) | 2.03 (0.7) | 2.05 (0.6) | | |
| 19. 授業内容がよく理解できている | 2.93 (0.6) | / | 2.86 (0.6) | 3.01 (0.6) | 2.92 (0.5) | | |
| 20. 授業内容に物足りなさを感じている | 1.97 (0.6) | / | 1.84 (0.6) | 1.97 (0.7) | 2.13 (0.6) | ** 4年>2年 | |
| 「フィールドワーク」(児童学基礎演習、保育インターンシップ・保育実習・教育実習など) | | | | | | | |
| 21. 授業内容に興味を感じている | 3.37 (0.7) | 3.39 (0.7) | 3.41 (0.6) | 3.33 (0.8) | 3.35 (0.7) | | |
| 22. 授業内容が期待していたものと違うと感じている | 2.01 (0.7) | 2.11 (0.8) | 1.91 (0.6) | 1.93 (0.8) | 2.08 (0.7) | | |
| 23. 授業内容がよく理解できている | 2.96 (0.6) | 3.05 (0.6) | 2.82 (0.5) | 3.00 (0.6) | 2.99 (0.5) | * | |
| 24. 授業内容に物足りなさを感じている | 1.92 (0.7) | 2.05 (0.8) | 1.80 (0.5) | 1.85 (0.7) | 2.00 (0.7) | * 2年>1年 1年>2年 | |
| 児 童 学 科 全 般 | 25. 児童学科で学んでいることが理解できている | 3.09 (0.5) | 3.12 (0.5) | 3.05 (0.4) | 3.07 (0.6) | 3.13 (0.5) | |
| | 26. 児童学科で学んでいることを人に説明することができる | 2.78 (0.7) | 2.57 (0.7) | 2.75 (0.7) | 2.87 (0.7) | 2.95 (0.7) | ** 3、4年>1年 |
| | 27. 児童学科では資格に関連する授業が多いと感じている | 3.18 (0.7) | 2.93 (0.8) | 3.04 (0.6) | 3.46 (0.7) | 3.33 (0.6) | ** 3、4年>1、2年 |
| | 28. 児童学科での学びは将来に役立つと感じている | 3.44 (0.6) | 3.53 (0.6) | 3.4 (0.6) | 3.46 (0.7) | 3.38 (0.7) | |
| | 29. 児童学科に親しみを感じている | 3.38 (0.7) | 3.41 (0.7) | 3.41 (0.5) | 3.36 (0.8) | 3.35 (0.6) | |

**p<.01 * p<.05

これらのことは、3、4年生の実習経験や就職活動経験などが関係しているかもしれない。本学の授業は、よりよい保育実践、子ども支援を学生が行えるような知識、理論を教授することが中心に行われる。実際の現場で必要とされる保育技術についても、実習や現場実践に向けて指導してきているが、学生の意識として、表面上の保育技術に目がいく傾向があるのだろう。また、本調査とは別に、複数の学生からのインタビューでは、保育実践に必要な理論よりも、保育や幼稚園教諭などの公務員試験に必要な知識を望む声もあったが、本調査結果についても、実用的な知識やてっとり早い保育技術を教えてもらいたいという希望の表れであったかもしれない。

「フィールドワーク」では、「授業内容がよく理解できている」において、2年生が1学年に比べて有意に高い値を示した。これは、2年次の前期に保育インターンシップが開講されており、受講した学生が授業内容を理解して取り組んでいる実態を反映したものと考えられる。また、「授業内容がよく理解できている」という項目に着目すると、専門科目の4つの領域で学年による差が見られなかった。

児童学科全般の項目を見ていくと、「児童学科で学んでいることを人に説明することができる」「児童学科での学びは将来に役立つと感じ

ている」という項目で、3・4年生が有意に高い値を示した。この結果から考えると、学年が進むにつれて学科の方針や内容を理解でき、将来に結び付けて学科の学びを考えることができていることが伺えた。

3. 子どもイメージについて

1) 学年による比較

子どもイメージに関しては、先行研究(河原ら、2007)で因子分析を行った。その結果、子どもイメージについては「能動的イメージ」「有能的イメージ」「安定的イメージ」の3因子構造を得ることができた。本調査でもこの下位尺度を用いて分析を行う。3つの下位尺度を構成する項目の合計得点を項目数で除し、各学年の平均と標準偏差を出したのが、表3である。この尺度は、得点が高いほど否定的なイメージになるものである。学年による比較を行うために分散分析を行った。その結果、「有能的イメージ」において学年で有意差が見られた($F_{(3,369)} = 10.07, p < .01$)。Tukeyの多重比較をおこなった結果、1年生が3・4年生と比べて有意に高い値を示し、2年生が4年生に比べて有意に高い値を示した。

結果を見ると、1・2年生と比べて3・4年生が子どもに対して有能的イメージを持っていることがわかる。調査時点では、1・2年生は実

表3 子どもイメージ 学年による比較

| | 平均値と (SD) | | | | 有意水準 多重比較 |
|---------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|--------------------|
| | 1年 (N=84~98) | 2年 (N=94~96) | 3年 (N=79~98) | 4年 (N=69~86) | |
| 能動的イメージ | 2.00 (0.53) | 2.15 (0.56) | 2.15 (0.55) | 2.16 (0.57) | |
| 有能的イメージ | 3.26 (0.61) | 3.23 (0.59) | 3.02 (0.66) | 2.82 (0.57) | **1年>3、4年 2年>4年 |
| 安定的イメージ | 4.95 (0.91) | 4.92 (0.67) | 4.81 (0.71) | 4.74 (0.59) | |

**p<.01 * p<.05

習を経験しておらず、長期に子どもとかかわる経験のある・なしが結果の左右しているのではないかと考えられる。

4. 保育者効力感について

1) 学年による比較

保育者効力感の各項目について、学年による比較をするために分散分析を行った(表4)。その結果、項目1、2、3、4、9、10の5項目に有意差がみられた(それぞれ、 $F_{(3,318)} = 4.50$ 、 $p < .01$ 、 $F_{(3,375)} = 2.92$ 、 $p < .05$ 、 $F_{(3,374)} = 4.07$ 、 $p < .01$ 、 $F_{(3,375)} = 4.65$ 、 $p < .01$ 、 $F_{(3,375)} = 3.96$ 、 $p < .01$)。Tukeyの多重比較の結果、項目2と10では、4年生が2年生に比べて有意に高い値を示し、項目1では、4年生が他の学年に比べて有意に高い値を示した。総じて4年生の得点が高い項目は、一人ひとりの子どもに応じたかわりや保護者へのかかわりに関する項目であり、実際に子どもや保護者とかかわった経験が影響すると考えられる。4年間の学びや経験の積み重ねの結果と考えられる。

一方で、項目1、2、9、10では2年生が有意に低い値を示し、項目5では2年生が有意に高い値を示した。この結果は、昨年度同じ項目で実施した先行研究(小原ら, 2010)と同様な傾向であり、2年生が保育の難しさや課題を特に意識してことが伺えた。

また、保育者効力感尺度は、村上ら(2008)の先行研究によって2因子構造であることが確認されている。本研究においては先行研究に従い、保育者効力感尺度は2因子構造が妥当と考え、項目1、2、4、6、8、9、10を「効力の認知」、項目3、5、7を「限界の認知」として下位尺度を構成し、構成する項目の合計得点を項目数で除したものを下位尺度得点として、各学年の平均と標準偏差を算出した(表4)。学年の差を見るために、「効力の認知」「限界の認知」の下位尺度得点について、学年を要因に分散分析をした(表4)。その結果、両因子において学年差が見られた(それぞれ、 $F_{(3,318)} =$

5.63 、 $p < .01$ 、 $F_{(3,374)} = 5.35$ 、 $p < .01$)。Tukeyの多重比較の結果、「効力の認知」では、4年生が2・3年生に比べて有意に高い値を示し、「限界の認知」では、4年生が1、2、3年生に比べて有意に低い値を示した。

2) 4年生を対象とした経年による比較(2年次から4年次までの比較)

現在の4年生(1期生)を対象として、2年次の保育実習終了後(2008年11月)、3年次(2009年7月)、4年次(2010年7月)での保育者効力感の比較を行った。3年間のデータが揃っていないケースは分析から除外し、82名のデータを用いた。結果、「効力の認知」の合計得点の平均は、2年次は、23.5、3年次は、22.8、4年次は22.9、「限界の認知」は、2年次は7.5、3年次は7.9、4年次は7.3であり、Mauchlyの球面性検定を行った結果、「限界の認知」に有意差が見られ($F_{(2,162)} = 4.11$ 、 $p < .05$)、Bonferroniの多重比較を行った結果、3年次と4年次に有意差が見られた(表5)。

先に述べた保育者効力感の横断的データでは、4年生が保育者効力感があるとの結果であったが、経年変化の縦断的データにおいても、1期生は学年が上がるにつれ、保育者効力感が高まっていた。4年生になると、様々な実習を経験して、実際の子どもの発達の様子、保育の中でできること、難しいことなどを体験してきた。その中で、効力の認知が高まっていたこと、また、限界の認知が低くなっていったことは、実習を通じた現場経験が保育者効力感を着実に高めた可能性があることを示唆している。

今後の課題

1. 児童学科カリキュラムについて

本学児童学科のカリキュラムは、学生の学びのニーズにある程度応えている結果であった。しかし、4年生が「授業内容が期待していたものと違うと感じている」と評価している科目群もあったが、今回は科目群での評価のために、詳細な分析はできなかった。本学では、学生に

四年制大学の新生児童学科における学生の意識に関する検討（４）

表４ 保育者効力感 学年による比較

| | 平均値 (SD) | | | | 有意水準 多重比較 |
|---|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|-----------------|
| | 1年生 (N=91 ~98) | 2年生 (N=88 ~97) | 3年生 (N=94 ~98) | 4年生 (N=79 ~86) | |
| 1. 私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う | 2.92 (0.86) | 2.89 (0.70) | 2.95 (0.75) | 3.28 (0.77) | ** 4年>1、2、3年 |
| 2. 私は、子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う | 2.85 (0.80) | 2.72 (0.75) | 2.91 (0.76) | 3.05 (0.70) | * 4年>2年 |
| 3. 私が一生懸命努力しても、登園をいやがる子どもをなくすことはできないと思う | 2.99 (0.86) | 2.84 (0.79) | 2.85 (0.85) | 2.58 (0.71) | ** 1年>4年 |
| 4. 保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う | 3.05 (0.82) | 2.84 (0.84) | 2.92 (0.81) | 3.10 (0.78) | |
| 5. 私は保育者として、クラスのほとんどの子どもが理解できるように働きかけることは無理であると思う | 2.53 (0.76) | 2.68 (0.72) | 2.52 (0.83) | 2.27 (0.69) | ** 2年>4年 |
| 6. 私は、クラスの子ども１人１人の性格を理解できると思う | 3.73 (0.77) | 3.64 (0.66) | 3.66 (0.66) | 3.85 (0.64) | |
| 7. 私が、やる気のない子どもにやる気を起させることは、むずかしいと思う | 2.77 (0.89) | 2.79 (0.84) | 2.71 (0.90) | 2.50 (0.78) | |
| 8. 私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う | 3.32 (0.83) | 3.23 (0.77) | 3.04 (0.79) | 3.26 (0.71) | |
| 9. 私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う | 3.07 (0.83) | 2.77 (0.80) | 2.79 (0.78) | 3.05 (0.77) | ** 1年>2年 |
| 10. 私は、保護者に信頼を得ることができると思う | 3.18 (0.71) | 3.01 (0.71) | 3.13 (0.67) | 3.38 (0.60) | ** |
| 下位尺度「効力の認知」 | 3.13 (0.53) | 2.99 (0.48) | 3.06 (0.47) | 3.29 (0.46) | ** 4年>2年 |
| 下位尺度「限界の認知」 | 2.76 (0.62) | 2.77 (0.57) | 2.69 (0.66) | 2.45 (0.56) | ** 1、2、3年>4年 |

**p<.01 * p<.05

表５ 保育者効力感の４年生の経年による比較 (N=82)

| | 平均値とSD (下段) | | | 有意水準 多重比較 |
|---------|-------------------|------------------|------------------|--------------|
| | 2年次 (2008年11月) | 3年次 (2009年7月) | 4年次 (2010年7月) | |
| 「効力の認知」 | 23.5 (3.1) | 22.8 (3.3) | 22.9 (3.1) | |
| 「限界の認知」 | 7.5 (1.8) | 7.9 (2.0) | 7.3 (1.7) | * 3年次>4年次 |

**p<.01 * p<.05

よる授業アンケートも実施し、その結果から教員は授業の改善や今後の展開への指針を得ているが、その結果も含めて、カリキュラムの検討を行っていかねばならないだろう。

2. 学生の学びと保育者効力感, 子どもイメージ

子どもイメージや保育者効力感に関しては、学生の経験とともに変化が見られたところであった。学生は現場経験をもとに、子どもの実態を捉え、肯定的に評価できるようになり、なおかつ、保育者としてのかかわりについての効力感を高めていったということは、実践家を養成する学科としては望ましいものであるだろう。ただ、個々の学生の進路やパーソナリティ、保育者スキルなどの個人要因で、これらの学びについても大きな差があることも予想される。さらに個々の学生に応じた保育者養成カリキュラムを展開していくためには、個人要因についても、見ていかねばならないだろう。この点については、今後の課題としたい。

文 献

河原紀子・矢吹芙美子・安田悟・入江礼子・川上雅子・足立美和・小原敏郎・村上康子・岡田智・武藤安子 四年制大学の新設児童学科における学生の意識調査-学生生活の実態および専門領域・子どもイメージ- 共立女子大学家政学部紀要, 54, 95-107 (2007)

三木知子・桜井茂男 保育専攻短大生の保育効力感に及ぼす教育実習の影響, 教育心理学研究, 46, 2, 203-211 (1998)

村上康子・大嶋恭二・矢吹芙美子・安田悟・

入江礼子・川上雅子・足立美和・小原敏郎・岡田智・河原紀子・加田洋子・丸田愛子・山田薫・武藤安子 四年制大学の新設児童学科における学生の意識に関する検討(2)-授業の学びおよび子どもイメージ・保育者効力感- 共立女子大学家政学部紀要, 55, 133-143 (2008)

小原敏郎・大嶋恭二・矢吹芙美子・安田悟・入江礼子・川上雅子・足立美和・岡田智・河原紀子・村上康子・加田洋子・丸田愛子・山田薫・武藤安子 四年制大学の新設児童学科における学生の意識に関する検討(3)-授業の学びおよび子どもイメージ・保育者効力感- 共立女子大学家政学部紀要, 56, 65-73 (2009)

岡田恵子・中新美保子・谷原政江 医療保健科学生と看護科学生における入学時の子どもイメージの比較 川崎医療福祉学会誌, 16 (1), 179-183 (2006)

若林佳史・前納弘武・草柳千早 ある新名称に基づく新設学部における学生の専門領域の認識と学習意欲の把握の試み-大妻女子大学社会情報学部。期生を例に- 大妻女子大学紀要社会情報系社会情報学研究, 2, 229-259 (1994)

矢野恵子・佐野香・宮崎つた子・池田浩子・杉本陽子・我部山キヨ子 育児中の父親・母親の「子ども」イメージ-1歳6か月児の父母と大学生の父母の世代間比較- 小児保健研究, 62 (6), 657-666, (2003)

吉田俊和・橋本剛・安藤直樹 大学生の適応過程に関する縦断的研究(1)名古屋大学教育學部紀要(教育心理学科), 46, 75-98 (1999)